

平成 31 年度（令和元年度）全国学力・学習状況調査の結果について

学びの改革支援課

- 今年度から、知識と活用（A・B問題）を一体的に問う調査問題となりました。
国語、算数・数学は、小・中学校ともに、平均正答数が全国と同程度となりました。今回初めて実施された中学校の英語は、平均正答数が全国を下回りました。
- 算数・数学は下降傾向が続き全国を下回っていましたが、昨年度、「算数・数学重点対策チーム」を立ち上げ、全県を挙げて授業改善に取り組んできた結果、改善傾向が見られました。
英語については、本年度5月に「中学校英語授業改善チーム」を立ち上げ、大学教授等の助言を受けながら、「聞くこと」「話すこと」「読むこと」「書くこと」の4技能を育成する指導の在り方やパフォーマンステスト等の改善に取り組んでおり、今後の学校訪問や研修会を通して、各学校・各学級の課題に応じた重点的な支援をしていきます。

1 実施状況

学校	実施学校数	当日実施児童数（小6）・生徒数（中3）
公立小学校	365校（内特別支援学校5校）	17,649人
公立中学校	189校（内特別支援学校6校）	16,440人

※当日実施児童・生徒数は、回収された解答用紙が最も多かった教科の解答用紙の枚数で算出。

2 長野県と全国の平均正答数と平均正答率の比較（公立）

上段：平均正答数／設定問題数、 下段：平均正答率

校種	年度 教科	平成 31 年度（令和元年度）		年度 教科	平成 30 年度	
		長野県	全国		長野県	全国
小学校	国語	8.9／14問	8.9／14問	国語A	8.6／12問 72%	8.5／12問 70.7%
		64%	63.8%	国語B	4.4／8問 55%	4.4／8問 54.7%
	算数	9.2／14問	9.3／14問	算数A	8.7／14問 62%	8.9／14問 63.5%
		66%	66.6%	算数B	5.0／10問 50%	5.1／10問 51.5%
	理科			理科	9.8／16問 61%	9.6／16問 60.3%
中学校	国語	7.3／10問	7.3／10問	国語A	24.5／32問 76%	24.3／32問 76.1%
		73%	72.8%	国語B	5.5／9問 61%	5.5／9問 61.2%
	数学	9.5／16問	9.6／16問	数学A	23.6／36問 65%	23.8／36問 66.1%
		60%	59.8%	数学B	6.4／14問 46%	6.6／14問 46.9%
	英語	11.3／21問 54%	11.8／21問 56.0%	理科	17.9／27問 66%	17.9／27問 66.1%

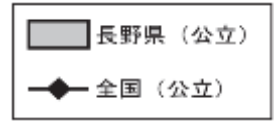
※文部科学省において、平均正答率の微小な差異は実質的な学力面の違いを示すものではないため、都道府県の結果は小数点以下を四捨五入した整数値としている。

※中学校英語の調査結果は「聞くこと」「読むこと」「書くこと」の合計を集計。学校のPC端末等を利用して実施した「話すこと」は参考値であるため集計から外してある。

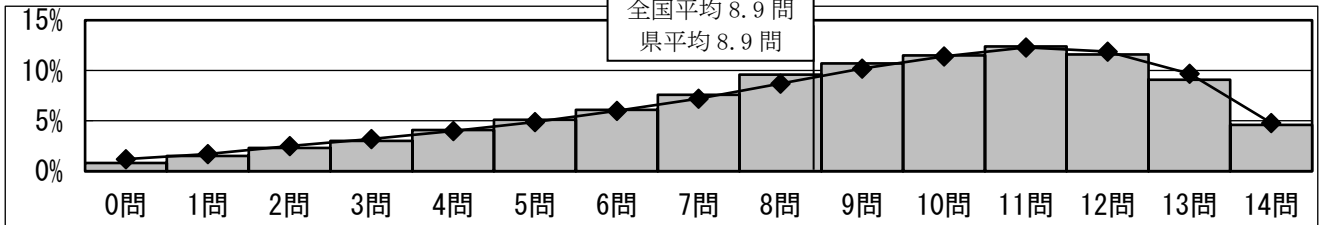
3 長野県と全国（公立）との正答数分布グラフの比較

[小学校]

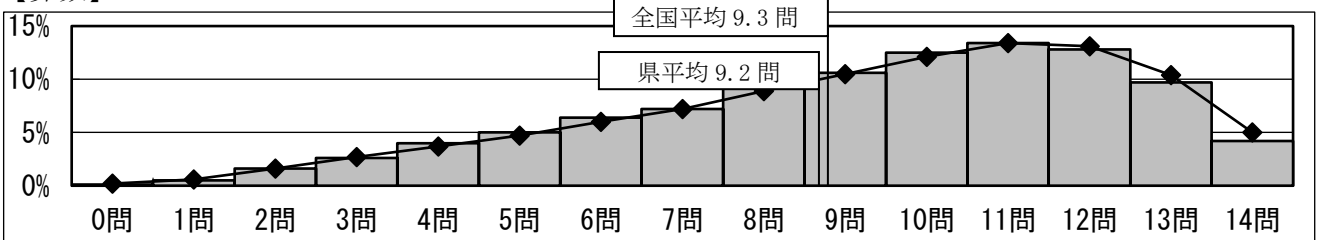
国語、算数ともに正答数の分布は、全国とほぼ同様の傾向である。



【国語】 [正答数分布グラフ（横軸：正答数、縦軸：割合）]



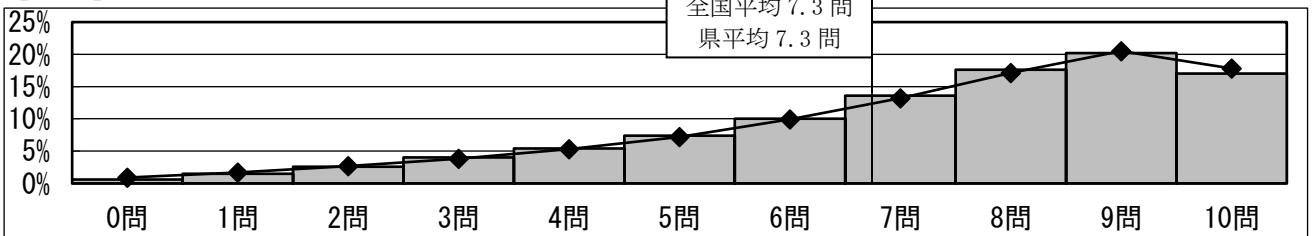
【算数】



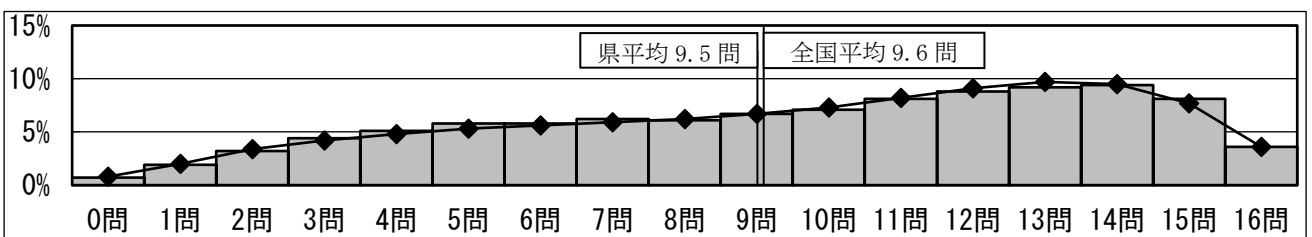
[中学校]

国語と数学の正答数の分布は、全国とほぼ同様の傾向である。英語では、正答数が5問から12問の生徒の割合が全国平均よりも高く、14問以上の生徒の割合が全国平均よりも低い。

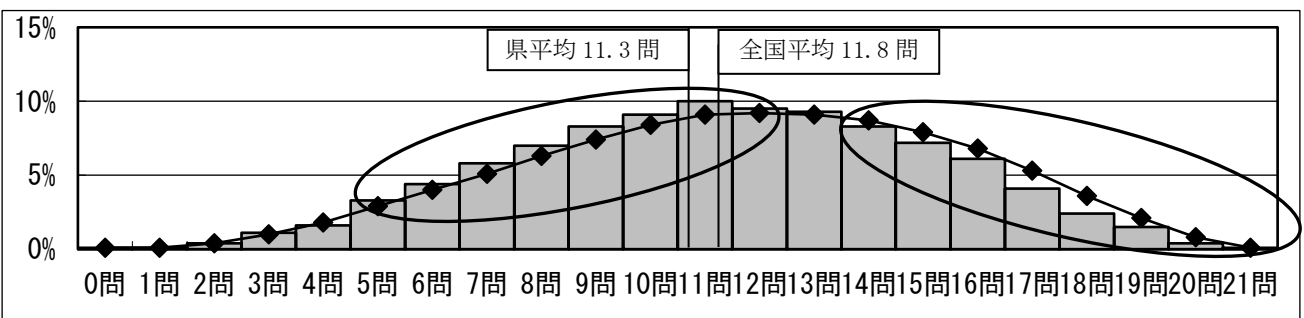
【国語】



【数学】



【英語】



4 分布に着目した経年の状況

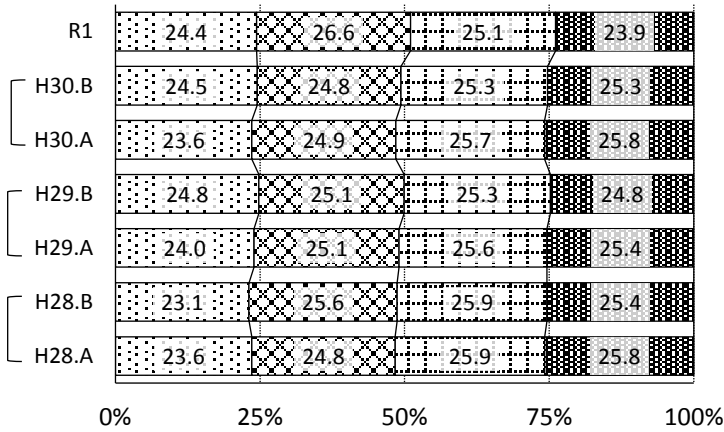
全国の受検者を正答数の多い順に並べ、上位から25%ずつ4分割(境界を含む階級の度数を按分することで、4等分となるよう補正)し、それぞれの区分をⅠ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳとした上で、各区分に入る長野県の児童生徒の割合を求めたもの。

【小学校】

【中学校】

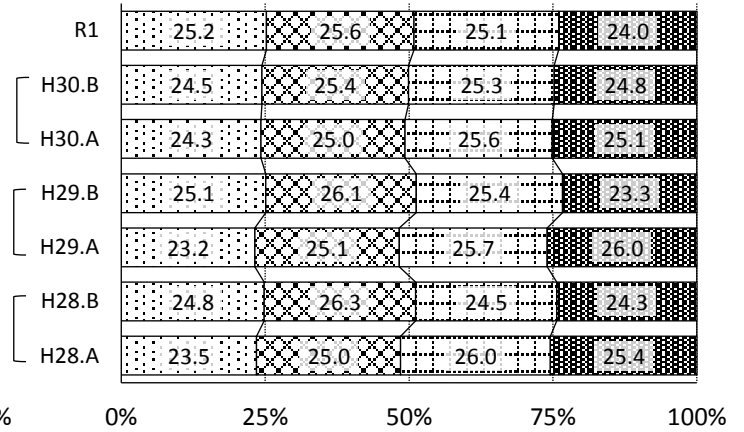
小・国語

□Ⅳ ▨Ⅲ □Ⅱ ■Ⅰ



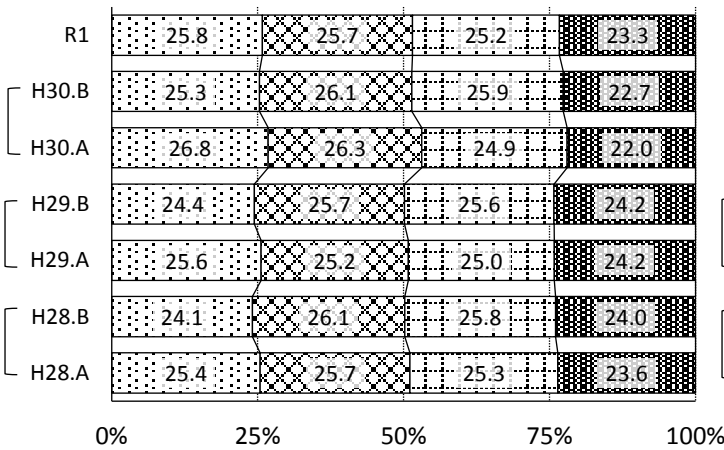
中・国語

□Ⅳ ▨Ⅲ □Ⅱ ■Ⅰ



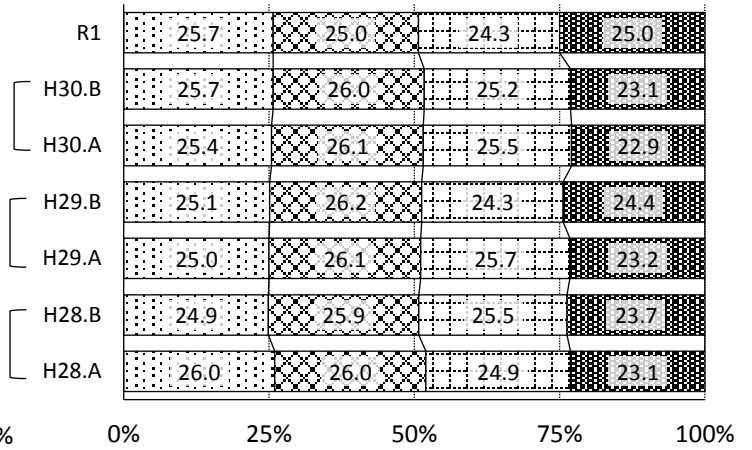
小・算数

□Ⅳ ▨Ⅲ □Ⅱ ■Ⅰ



中・数学

□Ⅳ ▨Ⅲ □Ⅱ ■Ⅰ



5 質問紙調査等の回答状況

計画を立てて家庭学習に取り組む児童の割合は、昨年度より増加し全国よりも高い。また、話し合う活動を通して自分の考えを深めたり広げたりできている児童生徒の割合は全国と同様に減少している。

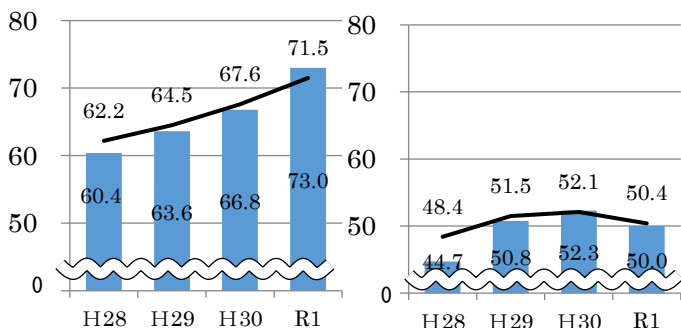
算数・数学については、授業の内容が分かると回答している児童生徒の割合は全国と同程度である。また、補充的な学習の指導を行っている学校の割合は昨年度より増加したものの全国よりも低い。また、実生活との関連を図る授業を行っている中学校の割合は全国よりも高いが、小学校の割合は全国より低い。

※「当てはまる」、「どちらかといえば当てはまる」を合わせた回答の割合
 ※各項目の左が小学校、右が中学校の調査結果

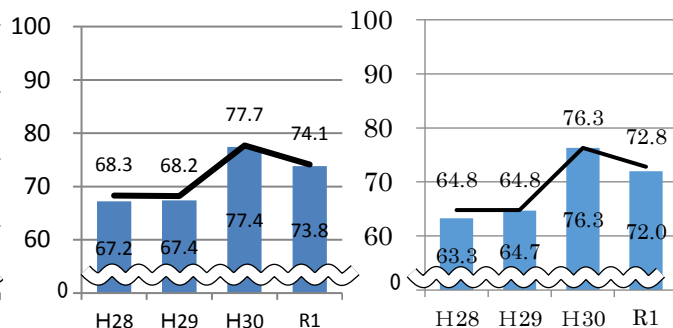
長野県
 全国

〔児童生徒質問紙調査〕

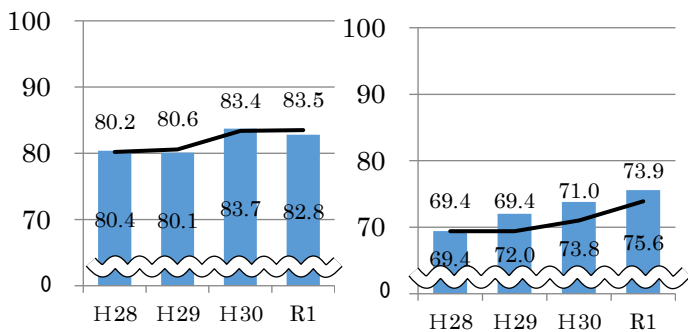
①家で、自分で計画を立てて勉強をしている



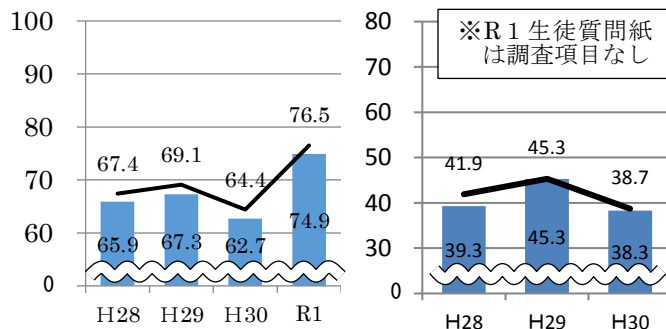
②児童生徒の間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができる



③算数・数学の授業の内容はよく分かる

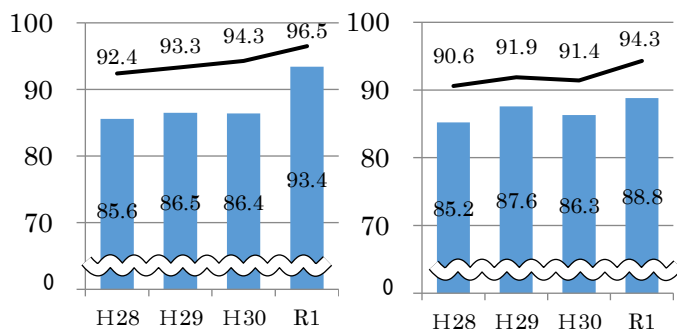


④算数・数学の授業で学習したことを普段の生活の中で活用できないか考える

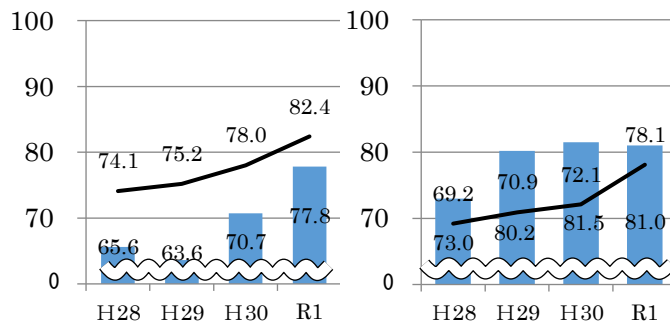


〔学校質問紙調査〕

⑤調査対象学年の児童生徒に対する算数・数学の指導として、前年度までに、補充的な学習の指導を行った



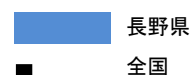
⑥調査対象学年の児童生徒に対する算数・数学の指導として、前年度までに、実生活における事象との関連を図った授業を行った



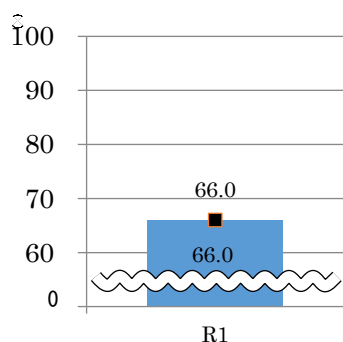
6 英語に関する質問紙調査等の回答状況

英語の授業はよく分かると感じている生徒の割合は全国と同程度であるが、特に4技能における「話すこと」(自分の考えや気持ちを英語で伝え合ったり、まとまった内容を英語で発表したりする活動)が行われていると回答している生徒の割合は全国よりも低い。

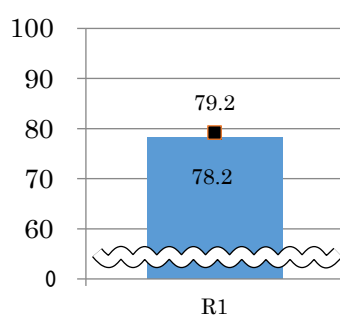
〔生徒質問紙調査〕



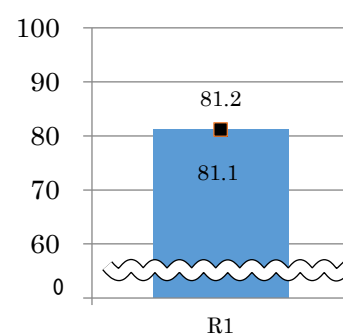
①英語の授業はよく分かる



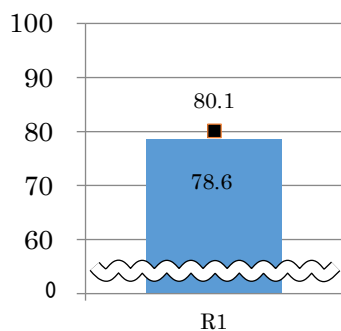
②英語を聞いて(一文一文ではなく全体の)概要や要点をとらえる活動が行われていた【聞く】



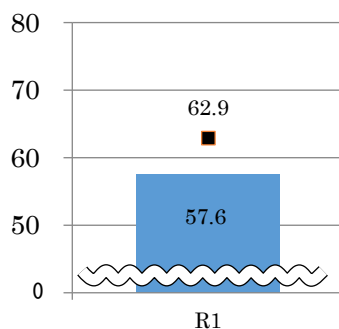
③英語を読んで(一文一文ではなく全体の)概要や要点をとらえる活動が行われていた【読む】



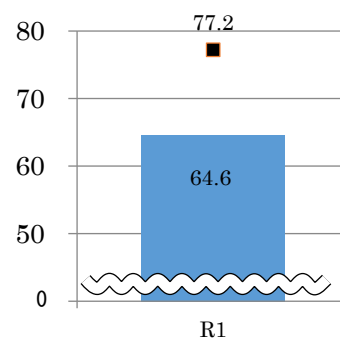
④自分の考えや気持ちなどを英語で書く活動が行われていた【書く】



⑤原稿などの準備をすることなく、(即興で)自分の考えや気持ちを英語で伝え合う活動が行われていた【話す(やり取り)】

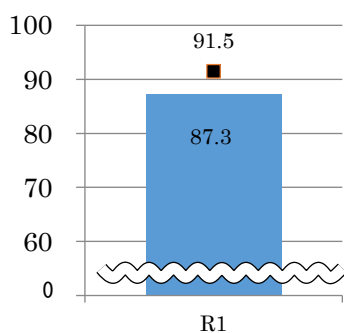


⑥スピーチやプレゼンテーションなど、まとまった内容を英語で発表する活動が行われていた【話す(発表)】

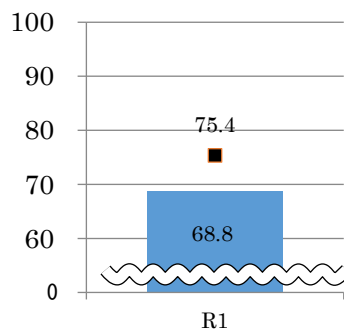


〔学校質問紙調査〕

⑦調査対象学年の生徒に対する英語指導として、前年度までに、補充的な指導を行った



⑧調査対象学年の生徒に対する英語指導として、前年度までに、発展的な指導を行った



7 今回の結果を踏まえた重点的な取組

(1) 各学校の課題に応じた支援と効果的な取組の共有

昨年度、各学校が課題に応じた取組を行った結果、小・中学校ともに成果が見られたことから、その取組が更に充実するよう支援する。

- ・各学校がS-P表を活用し、補充・補完など、重点的指導を明確にして授業改善に取り組めるよう支援する。
- ・成果が上がっている学校に聞き取り調査をし、効果的な取組を全県に広め、各学校が分析結果を基に、これまでの取組を検証し、組織的・継続的に授業改善に取り組めるよう支援する。

※S-P表：Student-Problem score tableのこと。設問の正答率順、正答者数の多い順に児童生徒と設問を並び替えた正誤パターン表のことで、調査問題の特徴や児童生徒の反応パターンなどを分析するための手法。教員にとっては授業改善の手がかりとなり、児童生徒にとっては個別のつまずきが確認できるなど、分析に活用できる。

(2) 中学校英語への重点的な支援

中学校英語については、全国の平均を下回っていることから、早急に次の取組を進める。

- ・5月に立ち上げた、大学教授、中学校英語教育推進リーダー、指導主事で構成する「中学校英語授業改善チーム」において、調査結果を踏まえた授業改善の重点を明確にする。
- ・「中学校英語授業改善チーム」の検討を受け、教員が自らの英語授業を見返すことのできるセルフチェックシートを作成し、「聞くこと」「話すこと」「読むこと」「書くこと」の4技能をバランスよく育成する活動を位置付けた単元構想等について具体的に支援する。
- ・各学校の課題となっている技能を授業で向上させ、生徒が力の伸びを実感できるようなパフォーマンステスト等の改善に向けて、9月と12月～1月の2回、研修会を開催する。